

切腹百子

深夜一時を回った。

終電もなくなり、俺と首高は行くあてもなく赤羽一番街をうろついていた。散々呑んだ後で、気分だけやけに高揚していた。

人はまばらだが、眠らない街と言うだけあってこの時間にしては多い。倒れ込んでいる青年や、若い女の子に抱きついている中年の男もいた。地獄のようだと思う。

「これからどうする、猪狩」

首高は俺のほうを見向きもせずと言った。

「どうするって言われても困るな」

カラオケボックスはこの間別の友人と行ったばかりだし、もうこれ以上酒は飲みたくない。日付を超えたので、キャバクラや風俗店も閉まっている。ガールズバーなら開いているが、セックスできない女に金を払う気は起きない。

「あつ、そうだ。デリヘル呼ばない？」

ちようど酒も入っていてテンションは高いほうだし、嬢はホテルに呼ぶから、終わった後そのまま寝ることもできる。

「この時間やってるの？」

「デリならやってるよ。ソープはやってないけど」

「詳しいねえ」

そう言うと、首高はポケットから煙草を取り出して啗えた。路上喫煙を咎める人もいない時間だ。

「俺は気乗りしないなあ」

「マジ？ お前、風俗好きじゃん」

「俺、風俗好きだと思われてたの」

ライターで煙草に火を点けながら、首高が苦笑いを浮かべる。

首高はスポーツ刈りに顎髭と口髭を蓄えた筋肉質の男

らしい風貌で、煙草を吸うと妙に様になる。現役の鳶で、一部の界限ではかなりモテるらしい。どの界限かは知らないが……。

「だって結構行ってんじゃん。おすすめのソープ教えてくれたのお前だろ」

北千住のエターナルヘヴンという店だ。

「ああ、そうだったけ」

「もう風俗は飽きた？」

「いや……、」

首高は逡巡するように、煙草のフィルターや自分の顎髭に触れた。

「このことさ、誰にも言わないで欲しいんだけど」

「何、インポにでもなった？」

「インポじゃないんだけどさ」

「性病かなんか？」

「まあ、みたいなもんだねえ」

煙を吹き出しながら首高が言った。ネオンの光と空の闇が交差する空中を、もくもくと白い煙が広がっていく。「チンコが荒れてかゆいから、病院に行ったら性器カンジダだった」

性器カンジダ。

そういう病気の治療薬のCMを見たことがある。だが、そのときは『性器カンジダ』ではなく、『膣カンジダ』という名前だった気がする。

「カンジダって、女のなる病気じゃないの？」

「俺も女の病気だと思ってたんだけど、女のほうが罹りやすいってだけらしいな。現に、俺も罹ったわけだし」

カンジダは日和見感染症で、セックスでうつることもあるが、たいていは菌が大量に繁殖したり、免疫力が低下することで感染するのだという。女は性器が内側にあ

って蒸れやすいし、生理でホルモンバランスが乱れるからそのぶん罹患しやすいのだろう。首高が医者から聞いた話では、女の五人に一人は膣カンジダを経験したことがあるらしい。

「じゃあ、治るまで風俗は行けないな」

「ああ。うつすかもしれないし、薬も塗ってるしねえ」

「大変だな」

「でも厄介な性病じゃなくて良かったよ」

確かに、性器の変調に気付いたら真つ先に悪い想像をしてみよう。性病にはヘルペスのような二度と治らないようなものもある。もっと恐ろしいのは、エイズになりやすくなることだ。

「俺は包茎だし、ずっとボクサーパンツを履いているから、かかりやすいんだって医者に言われたよ」

そう言うと、首高は靴の裏に煙草を擦り付けて火を消し、その場に吸殻を捨てた。

その晩は結局、ファーストフード店で半分眠りながら夜を明かした。

\*

朝になり、首高と別れてから携帯を開くと、実家にいる母親からの留守番電話が入っていた。朝までに電池が切れないよう夜は通知が来ない設定にしていたので、その間にかかってきたのだろう。陰鬱な気持ちになりながら再生する。

「凌太、あんたまだ就職してないでしよう」

説教から始まるので、気分がさらに重くなった。

就職していないというのは本当のことだ。以前はライン工として働いていたが、どうしても仕事場に行けない日が続き、解雇されてからはずっとアルバイトを転々としている。

「あのねえ、首高くんのお母さんに会ったけど、首高くん、国家資格取ったんだってよ。あんたもそろそろ、首高くんみたいに真面目に働いて、勉強しなさいよ。お母さん応援してるから」

メッセージはそれで終わっていた。

首高が国家資格を取ったのは、言われなくても知っている。とび技能士の二級だ。学歴はないが、実務経験を積みながら独学で勉強して取得した。真面目な男なのだ。仕事場にも行けないような俺とは人間の出来が違う。友達だというだけで比べられても困る。

\*

牛井屋でのんびりと朝飯を食べた後、赤羽岩淵から南北線に乗り、東大前にある千鶴のアパートへ向かった。

俺は今帰る家がないので、新しい部屋が見つかるまでという名目で千鶴の部屋に居候している。どうして家がないかという点、以前付き合っていた女からのストーカー被害に悩まされて、住んでいた部屋を引き払ったからだ。だが、別に部屋探しはしていない。千鶴に愛想を尽かされそうになったら重い腰を上げようと思っていた。

千鶴は一つ年下の大学四年生で、アルバイト先で出会った。何度かセックスもしたが、付き合っていない。学歴も低くフリーターの俺には、千鶴のことを幸せにできる自信がないからだ。

「……凌ちゃん？」

部屋の奥の方から、千鶴の高い声が聞こえた。音を立てずに鍵を開けたつもりだったが、千鶴を起こしてしまつたらしい。

「ごめん、昨日、帰って来れなくて」

「いいよ。おはよう」

「おはよう」

千鶴はいそいそとベッドから這い出てきた。ロングの黒髪、豊満な胸、低い身長。子猫のような愛らしい女だ。

「ねえ、凌ちゃん、あのさあ、言いたいことがあるんだけど、いい？」

言いながら、千鶴はソファに座った。神妙な面持ちだ。俺も隣に座る。

「どうしたの？」

「あの、……あたし、カンジダになってたみたいなんだけ」

「まじ？」

タイムリーな話題だ。

「就活のストレスもあったし……、ストッキング履いてたから、蒸れたんだと思うわ」

千鶴はスーツを着るとき、スカートの下に肌の色に合わせたストッキングを履く。最近は就職活動で忙しいので、毎日のようにそれだった。

「大丈夫なの？」

「別に……、女にとってカンジダは風邪みたいなものだから、大丈夫だよ」

そんなことはないだろうと思ったが、首高の話を思い出すと、千鶴の例えもあながち間違っていない気がする。

「それでね」

千鶴は言葉が続けた。

「凌ちゃんにうつしてるかもしれないから、検査を受けてきて欲しいんだけど……、いい？」

「ああ、構わないよ」

「ごめんね、あたしのせいで」

「いいよ。女はかかりやすいんだろ、仕方ないよ」

昨日覚えたばかりの知識だ。

「検査のお金はあたしが出すから」  
「いや、それくらい俺が出すって」  
「いいの？ ごめんね」

千鶴は金銭面で俺のことを一切信頼していない。部屋の家賃も、一切負担しないでいいと言ったほどだ。実際、俺は三割ほどしか負担していない。

「今日も説明会あるから、ごはんとかは自分で準備してね」

「ああ、うん」  
「ごめんね」

千鶴はスーツを着て化粧をし、髪を整えると、朝飯もそこそこにさっと家を出てしまった。食べたのは、コンビニのおにぎりひとつだけ。オールなんてせずに、朝飯くらい作ってやればよかった、と思った。同じことを先週も思った。だから多分、一生そんなことはしない。

\*

千鶴に言われた、その日のうちに病院に行った。駒込駅から徒歩五分の距離にある、男の性病を専門に取り扱う病院だ。医者は男しかおらず、女の入室は禁止されている。

予約はしていなかったが、カンジダの検査をしたいと問診票に書いて出すと、尿検査用の紙コップを渡された。内側に青い線が入っている。千鶴もこんな検査をしたのかな、と思いつつ、トイレで尿を採取して看護師に渡した。ここから一時間半くらい待たされるのかと思ったが（性病検査はだいたいそうなので）、結果が出るのは一週間後だと言われ、そのまま帰された。しかも、症状が出ていないから保険が利かないらしく、一万円近い料金を請求されてしまった。

そのまま帰ろうかと思ったが、ふと思立って首高に

電話をした。もし暇なら、飯でも食いにしようと思ったのだ。

「……もしもし？」

眠そうな声の首高が出る。

「寝てた？」

「夜勤に備えて寝てたわ」

わざとらしく怒ったように言われる。

「起きたなら飯食いにいかない？」

「フリーターは気楽でいいなあ。行くけど」

「今駒込にいるんだけど、どこがいい？」

「駒込にいいの？ じゃあ俺のとこ来てよ」

首高は日暮里に住んでいる。駒込からなら、山手線ですぐだ。

「首高の家に行くの？」

「俺の家に行っても食いもんは何もない。ファミレスかなんか行こうぜ」

「ファミレスかよ、貧乏くせえな」

結局、日暮里で会うことにした。

\*

「毎日会ってるからもう相思相愛だね私達」

会うなり、首高はそう言って小首を傾げて笑った。これが可愛い女の子ならいいのだが、髭面の強面で、肉体労働で鍛えた逞しい体つきのスポーツ刈りの男では、妙な薄気味悪さしか感じない。

「俺、首高しか友達いないから仕方ねえんだよ」

「首高だからまだいいだろ。俺なんか猪狩しか友達いないんだぜ」

「それは可哀想だな」

近場のファミレスに行き、ランチのハンバーグを注文した。首高は、パスタとサラダ、スープのセット。女み

たいなもの食うんだな、と言うと、「相思相愛だね」の笑顔向けられてしまった。

料理が来るまでにカンジダの検査をした話をしようと思ったが、受けた理由を思いつかないので、やめた。千鶴がカンジダになったことは言えない。カンジダは風邪ではないのだ。代わりに、検査のことを訊いた。

「首高は、カンジダどこで検査したの？」

「メンズクリニックだよ」

「どういう検査？」

「どういうって、チンコに綿棒を付けて菌を見る検査」

「へえ。そういう検査もあるんだな」

エイズや梅毒は血液検査、淋病やクラミジアは尿検査が多い。だいたいやったことがあるので分かる。

「結果はどれくらいで分かるもんなの？」

「どれくらいも何も、検査してすぐに出たぜ。その場で薬も処方された」

症状が出ているから、すぐに菌が見つかったのかも知れない。

「普通の性病検査と比べたら早い方だな」

俺が言うと、

「俺は性病検査したことないから分からないな」

と首高は返した。

「マジで？」

「マジだよ。何かあったら検査するけどさ、今まで何もなかったもん。症状出ないと保険利かないだろ」

何とも楽観的な男だ。症状がないのに、千鶴に言われてせっせと検査に行き、高額な検査費用を払った俺がバカみたいだった。

「風俗好きとしてあるまじきことだぜ。彼女にうつしたらどうするんだよ」

「俺は彼女なんていたことないし、素人童貞だから、そんな心配はないな」

「えっ、そうだったっけ？」

首高とは高校からの付き合いだが、確かに、彼女やセックスフレンドの話聞いたことはなかった。何度か、彼女はいないのかよ、と尋ねたことはあるが、そのたびに、今はいないと言われていた。

「凌ちゃんに捧げる為に大切に守ってきたのよ」

「首高なら吝かじやないな」

「やだ素敵……、抱いて！」

下らないことを言っていたら料理が来た。

ウェイトレスの中年女性は、髭面の筋肉質の男と痩せ型の長髪の男が茶番を繰り広げているのを、全く意に介さない様子で淡々と料理名を復唱して去っていた。客の話などいちいち気にしないのだろうが、俺は妙な気恥ずかしさを覚えた。

「そんなことよりも、猪狩は彼女とどうなの？」

首高は、料理には手を付けずに煙草を啜えながら言った。

首高がチェンスマーカーなので、ふたりでいるときは喫煙席のある店にしか行かない。

「彼女って誰だよ」

「千鶴っていう子だよ。付き合ってるんだろ」

ライターで煙草に火を点けながら言う。

首高は千鶴と会ったことはないが、俺が何回か話をしているので名前くらいは知っている。

「付き合ってるじゃないよ」

俺は首高の方を見ながらハンバーグに手を付けた。首高は、眉間に皺を寄せながら煙を肺に入れている。

「でも、同棲してるんだろ？」

「美羽から逃げるために避難してるだけだよ。新しい部屋が見つかったら出てく」

俺にストーカーをしていた美羽は、首高と俺の同級生だった。高校生の頃は、三人でよく遊んでいた。それだけに、首高も美羽が俺のストーカーになってしまったこととでずいぶん悩んでいたようだった。

美羽のストーキング行為が一番激しかったのは付き合い合っている頃だ。何度も非通知で無言電話をかけられたり、ポストに血の付いたラブレターや爪なんかを入られたりした。鼠の死体が入っていたこともある。別れてからメールアドレスを替え、SNSをブロックした後も、付きまといをされてかなり精神が疲弊した。

それでも、卒業後も付き合いのあった同級生はだいた美羽の味方をした。美羽が事実を否定したのもあるし、俺が男だということもあると思う。結局、俺の相談に乗ってくれたのは首高ひとりだけだった。

「じゃあ、部屋探はしてるわけ？」

「それは……、まだ、だけど」

そう言うと、首高は呆れたように白いため息を吐いた。

「なんで付き合わねえんだよ」

「俺はフリーターだし、資格も学歴もないから、付き合い合っても不幸にするだけだよ。いつか関係もやめるつもり」

「いつかって、いつだよ」

「……」

俺は答えられなかった。正直、千鶴に愛想を尽かされるのも、定職がないのに付き合い合うのも同じくらい怖かった。

首高は、目を細めながら灰皿に煙草を押し付けた。それから、何度か髪を掻き、コップの水を飲み干すと、漸く。パスタに手を付け始めた。

「好きにすればいいよ。でも、自分勝手な話だけど、俺は猪狩が幸せなのがいちばんいいんだ。知らない女の不幸なんてどうでもよくてさ」

「ずいぶんはつきりとした物言いだった。」

俺の幸せが何なのか、それは、よく分からない。だが、俺がフリーターである限りは、首高が思うような千鶴との幸せは見込めないだろう。

\*

「なんともないですよ、安心してください」

一週間後、検査結果を訊くために病院に電話を入れると、真っ先にその言葉を言われた。

大枚をはたかせ（フリーターにとって一万円は大金だ、一週間も溜めておいて、なんともない、とはあまりにもあつけない。しかし、だからと言って菌が見つかっても困るのだが……。

「同棲中の彼女さんがカンジダなんですよね」

「はい」

千鶴のことは、彼女と言った。説明するのが面倒だっただけだ。

「セックスは、彼女さんが治るまでしないでくださいね。うつるかもしれないし、それに、カンジダのときは腫れが傷つきやすいですから」

「はあ、はい」

「それから、同位タオルを使うのは控えてください」  
まるでインフルエンザの時のようだった。千鶴の、カンジダは女にとって風邪みたいなもの、という言葉を出す。

でも、風邪を引いているときにセックスをしないでくださいなんて、医者はわざわざ言わない。カンジダは風邪ではないのだ。

「もしも症状が出ましたら、また受診してくださいね。お大事になさってください」

そう言うと、電話は一方的に切れた。

カンジダではなかったのに『お大事に』とはどのようなだろうと思ったが、それが定型文だから仕方がないのだろう。とにかく、俺は健康体だったというわけだ。

\*

その日の夜、千鶴が帰ってくると、俺は真つ先に検査結果を伝えた。

千鶴はほっとした様子だった。内罰的な千鶴にとって、病気を他人にうつしたかも知れないというのは少なからず精神的な負担になっていたのだろう。

「それにしても、結果が遅かったね。あたしのおときはすぐに分かったのに」

「どういう検査だったの？」

「おりものの検査だよ。男の人はどうやって検査するの？」

「俺は尿検査だけ……」

ここ一週間で男のカンジダについてすっかり詳しくなつてしまったので、思わず色々と言いつつになった。だが、披露するような知識でもないので語尾を濁す。

「あたし、婦人科なんてなかなか行かないから、緊張しちゃった。検査台つてすごく恥ずかしいのよ。機械で脚を開かされるの」

「アダルトビデオみたいだな」

「男の人はそう思うかもしれないね」

千鶴は可笑しそうに笑ったが、俺の顔を見ると、すぐに悲しそうな顔になってしまった。

「治るまでエッチできなくてごめんね」

「そんなこと、気にしてないよ。千鶴が早く良くなるこ

とのほうが大切だよ」

「でも、あたし……。……いや、疲れたから、もう寝るね。ごめんね」

千鶴はスーツを脱ぎ、軽くシャワーを浴びると、裸のままベッドに横たわった。

俺も布団を敷き、寝転がる。居候の身なので、セックスをしない日は床に来客用の布団を敷いて寝ることにしていた。

「おやすみ、千鶴」

千鶴は返事をしなかった。代わりに寝息が聞こえてくる。どうやら、疲れていたのは本当のことだったらしい。

エッチできなくてごめんね、というのは、正直堪えた。まるで、千鶴が俺の為にセックスをしているみたいだったからだ。

いや、本当にそうなのかも知れない。

二十三にもなってフリーターで、その上ストーカーの被害にも遭っていた俺に、同情して家と体を貸しているだけ。

優しくて世話焼きの千鶴なら、あり得ないことでもなかった。

\*

翌日は朝から夕方までコンビニのバイトが入っていたので、俺は頭を空っぽにして働いた。店長から叱られようが、客から怒鳴られようがどうでもよかった。

家に帰ると、千鶴はぼーっとテレビを見ていた。今日は就職活動も大学もなかったようで、すっぴんにスウェットというだらしない恰好だった。

後ろから抱き締めると、千鶴は俺の腕を優しく掴んだ。やわらかい胸の代わりに、ワイヤーの入った、硬いブラジャーの感触がした。

「おかえり、凌ちゃん」

「ただいま」

千鶴に頬擦りをして、耳にキスをする。そのまま、スウェットの中に手を入れて胸を触ろうとしたが、手で払い除けられてしまった。

「もう、ダメだよ」

「ダメ？」

暖かい首筋を指でなぞり、肩口に顔をうずめる。皮膚がしつとりと指に吸い付いてくる。酸っぱくて甘い汗の匂いがした。

「……口でしてあげようか？」

優しい千鶴の声に、俺の頭は一気に冷静になった。ゆつくりと手を離すと、千鶴のほうが少し名残惜しそうな顔をした。

「ごめん」

「どうして謝るの？ いいんだよ、凌ちゃん」

「違う……。ごめん、ごめん」

俺は性処理の為に千鶴とセックスをするわけじゃない。好きだから触れたかっただけだ。

でも、千鶴は、そう思っていない。

同情だけで優しくされるのは、愛想を尽かされるよりも余程辛かった。それなら、冷たく振り払われたほうがよかった。

「俺、ちよつとどうかしてたかもしれない」

「凌ちゃん……」

「ごめん、頭冷やしてくる」

千鶴の声を振り払って、家を出た。

夜の文京区は静かで、人も車も見当たらなかった。倒れ込んでいる人もおらず、ゴミも嘔吐物もない。冷たい風が吹き、町全体が透き通った夜の空気に包まれていた。

俺は、千鶴のことを少し誤解していたようだった。優しい千鶴が、高卒なのに二十三になってもフリーターで、その上ストーカー被害に遭っていた「可哀想」な俺に愛想を尽かすわけがないのだ。

これ以上一緒に居ても、千鶴の負担になるだけだ。千鶴の為には、俺が千鶴から離れるしかない。

\*

家に帰ると、千鶴はもう寝ていた。

淡いブルーの着姿で、猫のようにベッドで丸くなっている。俺はその体に毛布を掛けてやると、小さな引越しの準備を始めた。

荷物はスーツケース一つ分しかなかったから、まとめるのは簡単だった。それ以外の家具は、どうしようもないから部屋を出たときに実家に返していたのだ。

今までありがとう、というメッセージと、今日までの家賃だけを机の上に置いて千鶴の家を出た。メトロはもう終電がなくなっていたので、俺はスーツケースを曳いて駒込まで歩いた。そこから、山手線で日暮里まで向かう。

実家に帰り辛い俺を受け入れてくれるのは、ひとりしかない。

「……いったいどうしたんだ、こんな夜中に」

首高は、タンクトップにトランクスという恰好だった。まだカンジダの症状が治っていないので、通気性の良いトランクスを履いているのだろう。

「ごめん、首高」

「いいけど、何で？ 追い出されたの？」

「違う。出てきたんだ、自分で」

言いながら、部屋に上がる。

首高の部屋は、千鶴の部屋よりも狭く汚かった。

「新しい部屋はすぐに見つけるから、少しの間だけ置いておいてくれ。勿論家賃は払うよ」

「それは別に、構わないけど……」

首高は俺をソファに座らせた。傍にある本棚にはとび技能士一級の教本が並んでいる。母親に言われるよりも鮮烈に、俺も頑張らなければいけないな、と思った。同情はもうされたくない。

「首高、千鶴は俺には優し過ぎたんだよ。このまま一緒にいたら共倒れすると思う。だから、お互いの為にももう一緒にいないほうがいいんだ」

「そうか。猪狩がそう思うなら、俺は口出ししないよ」

首高は笑って言った。俺には勿体ないほど良いやつだ。「シャワー借りてもいい？ 東大前から駒込まで歩いたんだ、汗かいちゃったよ」

「いいけど、バスタオルはあるの？ 俺の使うなよ、カンジダがうつるぞ」

「ああ……」

俺はスーツケースから、まだ使っていないバスタオルを取り出した。

\*

翌日から、部屋探しをすることにした。それと併せて就職活動も始めた。首高は俺を応援してくれて、色々と助言もくれた。

その間、千鶴からの連絡はなかった。

一週間経った頃には、首高もカンジダが治ったらしく下着がボクサーパンツに戻っていた。夜勤続きで疲れていたのが良くなかったのだろうと首高は言った。確かに、いくら包茎でボクサーパンツだからと言って、首高のような健康な男が簡単にカンジダに感染するわけがない。

それから一ヶ月ほど部屋探しと就職活動を続けて、郊外にある工場に就職が決まった。家は、そのすぐ近くにあるマンションを借りることにした。近くに電車の駅はないが、赤羽や王子まで行けるバス停がある。

俺の新しい住居は首高にしか教えなかったが、それでも美羽が怖いので、表札は出さないことにした。部屋を出たときに実家に返っていた家具は、引越し屋に頼んで運んでもらった。

こうして、漸く俺の新しい生活が始まった。

\*\*\*

猪狩が今まで働いてきたバイト先から、千鶴という女を探し出すのは簡単だった。猪狩はなんでも俺に話してくれるし、千鶴の顔写真まで見せてくれたからだ。

バイトから帰るところを尾行し、偶然を装って接触した。

「猪狩と付き合ってる千鶴ちゃんだね。俺、猪狩の友達んだけど……」

それだけで、彼女は俺を信用した。

彼女は猪狩が恋人になってくれないことで悩んでいた。体目当てなのかもしれない、それでも好きだから離れられない、と。

泣き言を親身になって聞き、軽く優しい言葉をかけてあげると彼女はすぐに体を開いた。就職活動と猪狩のことで、ずいぶん心が弱っていたのだろう。猪狩との関係が続けながら、俺に何回も抱かれにきた。

彼女がカンジダに感染しており、うつされてしまったのは想定外だったが、それも仕方ない。厄介な性病でなくて良かった。

俺は、呪いをかけるように彼女を甘やかした。ベッドの中では必ず、「体目当ての猪狩なんかやめて、俺にしな

よ」と囁いた。

それでも彼女が猪狩のことを好きで居続けたのには困ったが、その愛情を猪狩が勘違いしたのは嬉しい誤算だった。彼女は多分、「身体目当ての猪狩」という存在しないものの為に、あまりにも献身的になりすぎたのだろう。

猪狩が彼女のもとを離れると、俺は彼女に「性病の女はいらないってさ」と連絡を送った。ショックを受けた彼女を何度か慰めて、面倒になったところで俺も連絡を絶った。

彼女が猪狩に一度も連絡しなかったおかげで、美羽のときよりも簡単に全てが終わった。

美羽のときは、初めは血糊で汚したラブレターを猪狩の家のポストに投函することから始めた。バレたら絶縁も覚悟の上だったのだが、純粹な猪狩は、ラブレターに「美羽」と書かれていたのでそのまま美羽の作業だと思っただけ。勿論筆跡を真似したのもあるが、美羽も美羽で、猪狩のことを束縛しすぎるくらいがあったから余計に信憑性があったのだろう。それからはどんな嫌がらせをしても、美羽のストーリーキング行為だと思いつまみようになった。

爪はDNA検査をすればすぐに俺の姉貴のものだとわかるし、筆跡だってどんなに真似をしても検査をすれば美羽のものではないことなど分かるのだが、猪狩は最後まで警察には相談せず、美羽と別れることで解決を図った。無実の美羽は濡れ衣を晴らそうとするが、メールアドレスを変更され、SNSもブロックされているので、直接会いに行くという悪手を打ってしまった。そのせいで、濡れ衣のはずだったストーリーキング行為が事実となってしまうのだ。

結局、美羽と猪狩の間には修復できない亀裂が出来

猪狩は以前よりも俺に信頼を寄せてくれるようになった。猪狩さえいれば、同級生の中で孤立したことはどうでもよかった。だが、自分の為とはいえ、猪狩に嫌がらせをするのが心苦しかったので、そのときはかなり精神的に疲弊した。

それにしても、千鶴との関係が漸く終わって本当に安心した。俺のカンジダも治ったし、どうやら猪狩も感染しなかったらしい。

猪狩の為に女のいない就職先を探して勧めると、無事そこで働くことになったようだが、新居はまだ調べていないので油断はできない。

俺以上に頼れる人間はいないということを、そろそろ猪狩も分かってくればいいのだが……。